蒲田本社工場正面入口（昭和５年）

東京計器と蒲田モダンの時代

吉沼 雄一

蒲田モダン研究会十周年記念にあたり、東京計器（株）と蒲田モダンと題して、発表いたしました。

私の知る東京計器（株）は南蒲田にある大きな工場という印象で父より零戦の部品を製造していたことや、朝鮮池の話を少し聞かされておりました。

東京計器（株）の歴史は初代社長である和田嘉衛氏は明治時代に蒸気機関に使用された圧力計や羅針儀の製造などから始まりました。（それまで外国で製造された物を国産化するため）当初は和田製作所として始まりましたが従業員の数が増えたことと圧力計を計器と命名さたこともあり、東京計器と社名が変更されました。関東大震災がきっかけで、文京区小石川及び江東区にある小名木川工場より蒲田へ移転が大正一五年より始まり昭和五年に移転が完了し蒲田の歴史上の記録として残されております。その頃の蒲田はまさに蒲田モダン時代がある意味良い時代ではなかったのではないかと思います。蒲田松竹撮影所があり、撮影にかかわる人たちとの交流もあり華やかな時代であったようです。

その後時代は世界大戦に向かっていき、沢山の分工場が出来ていき敗戦色が強くなると長野県へ疎開が始まりました。今日の長野計器はこうした中生まれたもので世界大戦後圧力計をはじめとする計器類を長野計器が生産を行い。昭和二〇年の東京大空襲そして敗戦を乗り越え軍需産業からオートパロットや鉄道保線作業に関する機器、油圧機器、流量計等を手掛けるメーカとして歩み始めました、その後オイルショックやリーマンショック、工場を蒲田より栃木県（矢板工場等）への移転問題を乗り越え、現在蒲田には本社が存在し大田区を代表とする企業の一つではないでしょうか。発表に関して協力していただいた方々に感謝いたします。

探照灯試験用鉄塔（大正 13 年）

（蒲田で最初に建てられた建物であった）